



福興市



# 訪れたいまち

## 第19回 宮城県本吉郡南三陸町

平成23年3月11日。町は壊滅的な被害を受けた。  
しかし、南三陸町の人々はいきげない。  
笑顔や元気を分けてもらうために、被災地へ観光に行こう!



### 被災地に観光?

「観光」とは何か。一般的には、日常生活では見ることのできない風景や習慣などを楽しむための旅行を指すのではない。余暇を楽しむために、「観光」で被災地を訪れることは不謹慎だろうと思っていた。

しかし、ここ南三陸町には、たくさん魅力が詰まっている。「観光」という形で被災地を訪れることも応援の一つのスタイルなのではないか。

### 今しかない!

町が一変してから2年。震災直後と比較すれば町は片付いたように見える。しかし、新しく何かが目に見えてきたわけではない。今の状況を見ることができないのは、今だけなのだ。実際その地に立って、自分の目で見ることは大いに意味がある。新聞やテレビを通して見る光景とは全く違う。想像を超える津波の威力に驚愕し、自然の力の凄まじさ、人間には太刀打ちできない不条理を否応無しに肌で感じる。



現在の南三陸町(平成25年1月)

### 被災地だからできること

家や工場を失ったり、家族、親戚を目の前で亡くしたり、自分も背中に波をかぶりながらも命からがら逃げた、震災時のことを語る人達がいる。

震災前から、町の良さを広める活動をしてきた「語り部」。震災後、何か自分たちでできることはなにかと集まり、「被災地だからこそ伝えなければいけないことがたくさんある」と震災直後の平成23年5月から語り部ガイドとして活動を開始。涙無しには聞くことも語ることもできない。それでも語り続け、自然災害の恐ろしさや命の大切さを訴える。報道されない真の姿を伝えることで防災の大切さ、被災地への関心につながることを考えている。



「私達を忘れないでほしい。南三陸町に来ていただきたいのです」と語り部(ガイドサークル汐風)の皆さん。

また、他の自治体や教育関係者などが、自らの防災意識を高めるために町を訪れている。今の町の現状を見て、話を聞いて、帰ってから自分の大切な人達に伝えてほしいという想いで、さまざまな形での受け入れを行っている。

### 亡くなった方の想いを胸に

「商人たるもの、人様の支援物資に



甘えて悶々としているのは僕らの生き方じゃない」と町の商店主たちは立ち上がり、市を興す。その名も「福興市」。市を興して福となす。

以前より付き合ひのあった全国各地の商店街から、さまざまな物資やテナントも集めた。行く末が不安なのは皆同じ。しかし、明るく強く生きて、「もう1回チャレンジして復興してみせる! どうせやるならそういう気持ちでやらないと亡くなった方に申し訳ない」そんな想いを胸に、くじけないで前に進むしかない」と明るく笑う町の人々。

### 南三陸町の魅力とは

季節ごとに違う一級品、感動的な海の幸と美味しいお酒。そして、人だ。とにかく明るく人なつこい。

「被災されて、皆さん元気を無くしているだろう。少しでも元気づけることができれば」と来訪したものの、皆さんの明るさにあっぱれ! だった。「あそこに行く元気が出る」あの町の復興に携わりたい」と思わせる、人の元気がこの町のブランドだそう。誰に話しかけても笑顔が返ってくる。昔からここにいたような不思議な気分になった。まるで故郷に帰ってきたかのよう。



## 南三陸町の楽しみ方を伝授

**福興市** シーズンごとの月末開催予定。全国各地の商店街から集まる特産品や、もちろん町の逸品も。季節によって出店が変わるので、何度訪れても飽きることがない。会場では、店主達にどんどん話しかけてみよう。皆、揃って元気な笑顔で返事を返してくれる。

宮城県観光PRキャラクター「むすび丸」

福興市実行委員長の山内さんと町役場の宮川さん

南三陸町を新婚旅行先にしたご夫婦も

出店者の皆さん

大阪からた焼き屋さんも出店

福島県から同じ被災者として参加

美味しい地酒

ユニークな店主

南三陸町復興応援キャラクター「オクトパスくん」

「とりあえず食べてみて!」と薦めてくれる

海藻などを使ったロールケーキ「絆ロール」も美味しかった

南三陸志津川福興名店街運営組合長・及川善祐さん。エプロンは阪神大震災の被災地神戸から引き継いだ

ボランティアの方もお店の売り子として楽しんでいた

ともて元気なお母さん達

～第22回寒鰯祭り福興市(平成25年1月27日)～

前日は大雪だったが、大勢のお客さんと賑わった

登米市のキャラクター「はっどん」

地元の高校生も頑張っていた

警備の方々。寒い中、朝からご苦労様です

キレイなお姉様達も奮闘!

美味しいものがたくさん!

寒鰯の白子を天ぷらに

ヤマウチ鮮魚店店長さん、南三陸町観光協会の方、南三陸を愛す関東在住の方も

ボランティアの方々が朝から雪かきをしてくれた



福興市開催日・イベント詳細などについては南三陸町観光協会ホームページにて

<http://www.m-kankou.jp/>

### 国土交通省の支援

国土交通省では、東日本大震災の発生により、大打撃を受けた“観光”を被災前の水準に回復させ、さらにそれを超えた観光立国を実現していくための取り組みを行っています。訪日外国人旅行促進(ビジット・ジャパン事業)、東北・北関東への訪問運動など。今後も引き続き、さまざまな取り組みを通して「観光で日本を元気に」するための支援を行っています。



## 2つの商店街

旬の食べ物からお土産物などを取りそろえている。

豊楽食堂のヒロシくんとお店の方。ヒロシくんは祖母の匂いを手伝えるため、震災後東京から帰ってきた

パンとケーキのYUSHINDOさん。店内は甘い香りに包まれる

鮮魚店「ロイヤルフィッシュ」

創業旬魚「はしもと」

“絆ロール”などを取り扱う産直ショップ「りあん」

地元の海の幸がたくさん!地方発送もOK

ホテルで修行を積んだ店主(中央)の料理は最高!

### ●伊里前福幸商店街 (約10店舗)

平成23年12月13日オープン



写真家の佐藤さん。南三陸町の姿を記録する

### ●南三陸町さんさん商店街(約30店舗)

平成24年2月25日オープン



11~2月「いくら丼」

5~8月「ウニ丼」

町自慢のA級グルメ「キラキラ丼」。季節ごとに個性あふれる旬の丼を提供する



明治13年創業の及善蒲鉾店。現在は隣の登米市に再建した工場加工



松原食堂

志津川名産のタコは柔らかくて美味しい!



ヤマウチの元気なお姉様達! お薦めは「いかの塩辛」



南三陸町観光協会の皆さん

## トピック

### 南三陸モアイ化計画

昭和35年チリ地震による津波で被災したイースター島の支援にあたった日本へ、感謝の想いから30年後の平成3年に神聖なるモアイ像が寄贈された。平成23年の津波で損壊したため、新たにモアイ像が寄贈されることになった。「未来に・生きる(モ・アイ)」町として復活を目指す。(南三陸町には平成25年5月到着予定)



### 仙台・宮城デスティネーションキャンペーン(4月1日~6月30日)

期間中にさまざまな取り組みが行われます。

- 商店街のお得なクーポンやチケットの販売
- つつじシャトルバスの運行
- 南三陸おもてなし隊結成 など

震災の影響をほとんど受けなかった5万株のつつじで、燃えるような朱色に染まる田束山(震災前撮影)。



## キャンペーン

## 体験プログラム

### 漁業体験(季節限定)

養殖いかだを見学し、収穫を実地見学後、浜に戻ってバーベキュー。水揚げしたばかりの旬の海産物を味わいます。

他に、語り部による学びのプログラムや各旅行会社の企画ツアーも盛りだくさん。



## 復興に向けて

「我々は立ち止まってはいけない。ここでほっとしたり、『これでいいか』って言っちゃいけない」(及川善祐南三陸志津川福興名店街運営組合長)

次から次へ新しい手を打ってリピーターを呼ばなければ、これからの被災地は生きていけない。復興を見据えたベクトルをつくって、みんながそれぞれ力を発揮する。

町民の中には「震災を利用して金を稼ぐのか」という意見もある。しかし、観光協会やいち早く立ち上がった商店街の店主たちは、「とにかく今の状況を自分の目で見て、何かを感じてほしい。私達の経験を無駄にしたくない」と語る。

美しい景色と豊かな海に恵まれていたが、震災前は、この東北の小さな町も少子高齢化、不景気などマイナスな話が多かったという。3・11より前の衰退の始まりに戻るのではなく、震災をスタート地点として、過去を超える新しい町に甦っていくのではないかと。5年、10年では終わらないかもしれない。生涯を通して見守り、関わっていきたいと思わせる町、南三陸町。ここには、今を見て、話を聞き、人の笑顔に触れ、そして元気をもらうことができると多様な「観光」がある。思う存分南三陸町を味わいに出かけよう!

## MLIT レポート

全国各地で働く国土交通省職員が地元を紹介します。

Reporter

東北地方整備局  
仙台河川国道事務所  
建設監督官  
南 健二



**東** 日本大震災で損壊した家屋の解体などで発生した震災がれき（コンクリート殻など）の処理や有効活用は、被災地だけではなく、日本全国共通の課題となっています。

仙台河川国道事務所は仙台市と協働して、震災がれきの有効活用を目的に、平成23年7月から調査や実証試験を行ってきました。津波により発生した堆積土と、コンクリート殻を混合した結果、震災がれきを海岸堤防本体の材料として活用できることがわかりました。

そこで、被災3県で初めて海岸堤防復旧に震災がれきの本格活用を決定し、仙

台湾南部海岸堤防の復旧工事に着手しました。

**こ** の工事では、海拔7.2mの堤防を建設するための盛土として、震災がれきを約20万㎡（仙台市域海岸堤防の約7割）活用します。

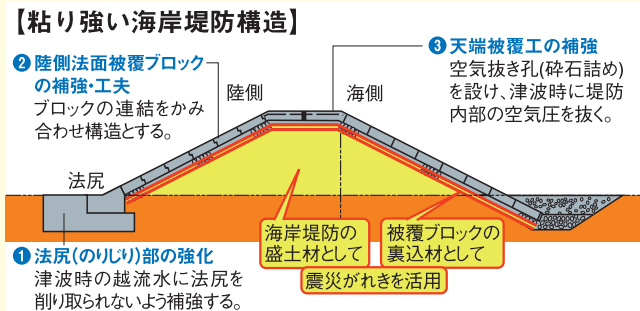
その結果、仙台市では、がれき処理が進み、仙台河川国道事務所では、盛土材の安定的な確保、市街地を通過するダンプ台数の低減（沿岸での処理が可能となるため、内陸からの購入土と違い、市街地を通過する必要がない）などの効果があります。今後、他の沿岸被災地でも震災がれきの処理や有効活用が広がっていくよう取り組んでいきます。



①混合機で津波堆積土とコンクリート殻を一定比率で混合。  
※環境省通知に基づき、津波堆積土の安全性が確認されたものを活用しています。



②混合し、改良土が完成



③改良土を敷きならす。その後タイヤローラーで固める。3~4m程度の高さまで盛る。

工事の進捗状況はこちらからご覧いただけます。

検索 週刊定点写真

[http://www.thr.mlit.go.jp/sendai/kasen\\_kaigan/fukkou/kouzi.html](http://www.thr.mlit.go.jp/sendai/kasen_kaigan/fukkou/kouzi.html)